國學院大學学術情報リポジトリ

雀と和歌：和歌の珍奇題材の検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: スピアーズ, スコット, Spears, Scott メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000015

雀と和歌
—和歌の珍奇題材の検討—

スピアーズ　スコット

一、はじめに

雀（スズメ）は、ヨーロッパ・アジアの広きにわたつて分布する鳥で、日本には全国的にみられる。古来、スズメは人の暮らしの中で日常的に目にしたであらう。そのため、史書にも登場し、平安時代では『源氏物語』に飼ひ雀の風習も登場するし、『宇治拾遺物語』には「雀報恩事」があり、平安時代以降、多くの文学作品で題材とされる。[1] 漢詩においても、雀は『詩経』以来、極めてよくみられる。

一方、雀は和歌では殆ど登場しない。丹羽博之は、漢詩にみられるが和歌に登場しない題材についての論考の中で、和歌に採用される題材にいくつかの傾向が見出だされるといふ。[2] 丹羽論文から左に引用する。

①鳴き声の美しさ（鶯・時鳥・鹿・雁）
②その季節の特徴　代表する景物（鶯・時鳥・雁・鹿）
③恋の結びつくもの（雁・鹿・時鳥・七夕・蛍・鵲）
④掛詞・序詞・縁語・歌枕と結びつくもの（蛍・弓張り月）

これらの条件を多く満たす題材は、和歌に採用される確率が高く、逆にどの条件も満たさないものは、殆ど和歌にみられない傾向にあるといふ。

右のやうな傾向には、雀はどれほど当てはまるのだらうか。まづ、上代から南北朝期頃までの雀を詠んだ歌を検討して、最後にこの問題に立ち戻る。[3]

二、上代

雀は『古事記』『日本書紀』を始めとして、多くの散文作品に登場する。『古事記』では、次の歌謡に見られる。[4]

ももしきの　大宮人は　鶉鳥　領巾取り掛けて　鶺鴒
尾行き合へ　庭雀　踞集りゐて　今日もかも　酒漬くらし
高光る　日の宮人　事の語り言もこをば

これは雄略天皇が豊楽（とよのあかり、宴会）に際して歌つたものと伝へられてゐる。「庭雀」はどのやうな比喩なのかは審らかではないが、雀が群がるやうに、廷臣が宮中に集まつて蹲つてゐる様を描写してゐると考へられる。[5]この歌謡自体の影響は平安朝以後の和歌には認められなく、江戸時代の国学者の間で多少材料とされる程度であるが、雀の群がるさまは、平安時代以後、繰り返し描かれる。

三、平安時代

『万葉集』に雀は登場しない。勅撰和歌集での初見は鎌倉時代末の『玉葉和歌集』の中の一首だ。そのため、勅撰和歌集以外の資料を頼りに、和歌の中の雀を検討していく必要がある。

現存する雀の和歌の初例は、管見に入る限り、曾禰好忠の家集『曾丹集』（『好忠集』）の次の一首である。[6]

三月中
ねやのうへにすずめのこゑぞすだくなる出たちがたに子やなりぬらん　（七三番歌）

これは三百六十首歌中の一首で、晩春の情景を描いてゐる。描写されるのは、雀そのものといふよりも、雀の雛が孵ることであり、季節感はそこにあるとみられる。ちなみに、俳句では雀は季語とはならず、春の季語として「雀の子」があり、この

好忠詠との関連もあらう。[7] また、この一首は『白氏文集』５０９の「嘖嘖雀引雛、稍稍笋成竹」等、漢詩文の影響の可能性も指摘されてゐる。[8]

次に雀がみられるのは院政期の私家集や定数歌の中だ。成立時期に前後はあるが、まづ定数歌をみる。『堀河百首』「田家」題で師時が次の一首を詠んだ。

むれてゐる田中のやどのむら雀わがひくひたにさわぐなるかな　（一五一三番歌、源師時）

ここでは、田園風景の中での雀が描写される。「ひた」とは「引板」で、作物を守るため、竹の管を板から下げ、引くと音を立てて鳥獣を驚かす道具だ。「鳴子（なるこ）」ともいふ。歌の季節は特定しがたいが、夏・秋の歌とみてよいだらう。

右の一首と同様の光景が同百首「田家」歌の中で「稲負鳥（いなおふせどり）」といふ鳥についても描かれてゐる。

秋田もるおしねのひたははへたれどいなおほせ鳥のきなくなるかな　（一五一一番歌、藤原仲実）

我かくる門田のひたにおどろきていなおほせ鳥の立ちやさわがん　（一五一四番歌、藤原顕仲）

「稲負鳥」は古今伝授の三鳥として有名だが、その実態はよく分からず、中世以降、多くの説が生まれるに至つた。その中で、雀とする説もある。右の両首も雀の描写かもしれない。[9]

保延元年（一一三五）頃の『為忠家後度百首』では、冬・雪十五首中に二首が確認できる。

（竹園雪）　兵庫頭仲正
たけにふすねぐらのすずめけがへしてうへはにゆきのふりにけるかな　（四六六番歌）

（牆根雪）　備後守為経
あさごとにやどにさへづるむらすずめこしばのゆきをふみなちらしそ　（五二五番歌）

家永香織がこの二首について興味深い説を提示してゐる。[10] まづ、中正の歌は雀の上に雪が降り被つたことを、羽が抜け白く生え替はつたやうに描写してゐるといふ。一方、為経の歌は『源氏物語』若紫巻中の、若紫が住む「なにがしの僧都」坊が想起されるとする。無論、同場面で幼い紫の上が飼つてゐた雀

を犬君が逃す。『源氏物語』のこの場面との関連も考へられるが、美しく小柴垣に降り積もつた雪を、雀に散らさないでほしいといふ描写に留まつても、情趣ある歌でもある。

同時期の歌人の家集に目を転じる。まづ、源俊頼の家集『散木奇歌集』に次の歌と連歌がみられる。

（恨躬恥運雑歌百首　沙弥能貪上）

はたけふにきびはむしじめしじめきてかしましきまでよをぞうらむる　（一五一四番歌）

すずめのきざはしの男ばしらにゐてなくをみて　肥後君

すずめこそをとこばしらになきゐたれ　（一五八〇番歌）

つく

きざはしたなくいひやしつらん

雀は「すずめ」や「すずみ」と呼ばれたやうだが、「しじめ」とするのはこの一例だけらしい。『袖中抄』では「此俊頼歌にはしゞめしゞねきてしてとあるは、鳴心と聞こえたり。しゞめはすゞめなり。しす同音なればよめり。」と、同歌について説く。[11] 不条理な世の中を嘆く自分をうるさく黍をついばむ雀に例へてゐる。[12]

連歌では、珍しく雀は恋の歌に登場するのだが、『散木奇歌集標注』の説によると、この「すずめ」は女房の名前だといふ。[13] 俊頼の句では「きざはしたなく」とは「階（きざはし）」と「はしたなく」をかける。このやりとりは男柱（橋や階の端にある太い柱）に雀が飛びついて鳴いてゐる様子を擬人化したものだらうか。

また、俊頼の歌として南北朝期成立の『六花和歌集』（貞治三年、一三六四以降）に次の一首がみられる。

むれてゐる田中の庵のいなすずめ我がひくひたにさわぎぬるかな　（六四五番歌）

俊頼の実作かは不明だが、同様の歌が延文（一三五六～一三六〇）頃の『三百六十首和歌』七月中旬の歌としてもみられる（第二句「田中の畝の」、第四・五句「我が引くたびにさわぐ間もがな」、二一二番歌）。当時では俊頼の歌として知られてゐたであらう。『堀河百首』師時詠と同様の情景が描かれてゐる。

『基俊集』では、藤原基俊と三条大納言実行との贈答がある。

三条大納言、聞ゆる事侍りて人つかはしたるに、ちがひてかれよりかくいひおこせられたりし

かぎりあれば富士の高ねになるさはの我がおとづれにあにまさらめや

返し

たまさかにむれゐるすずめ朝ごとに我こそまづはおどろかしつれ　（九三・九四番歌）

基俊は実行に頼み事があつて使者を派遣したが、実行の歌でその依頼に肯定的に解答してゐる。その一方で基俊は、心情の不安定のため寝付きが悪く、早起きのはずの雀をかえつて起こしてしまつてゐる、と訴へる。

六条院宣旨（顕良女、俊成室）の家集『六条院宣旨集』には次の『堀河百首』題で詠まれた一首がある。

たのいへ

いなすずめむれわたるなりしづのやのかどたのひたにてだまやすむな　（九四番歌）

趣向は『堀河百首』中の歌と同様に、田中の風景だ。

『行宗集』（源行宗の家集）所収崇徳天皇初度百首と思はれる百首歌中に、「竹」の題で次の一首がみられる。

あかねさすひもくれたけにかぜふけばねぐらさだめぬすずめなくなり　（二六三番歌）

この百首は崇徳天皇在位中の保安四年（一一二三）から永治元年（一一四一）までの間に詠進されたといはれてをり、右の『為忠家後度百首』と時期は重なる。竹と雀を取り合はせた歌はこの頃から詠まれるやうになつた。

覚性法親王（鳥羽天皇皇子、大治四年一一二九～嘉応元年一一六九）の家集『出観集』秋部に「田家霧」の歌として次の一首がある。

けさはただなるこもひかじいなすずめたちへだてたる霧にまかせて　（四四五番歌）

平安時代末の『風情集』（藤原公重の家集）に二首確認できる。

田家眺望

いねがてになるこのすずめさわぐめりやまだのいほに日影くるれば　（五三〇番歌）

ねやのうへにすだくすずめのこゑばかりしうしうとこそねはなかれけれ　（五五八番歌）

賀茂重保撰の『月詣和歌集』（寿永元年、一一八二成立）十月部では一首確認できる。

暁雪をよめる　大納言実房

降る雪にねぐらの竹やをれぬらんよをこめてなく村雀かな　（九三三番歌）

雪の重さに下折れする竹の描写は同時代の歌人として藤原範兼の歌「あけやらぬねざめの床にきこゆなり籬の竹の雪の下をれ」（『新古今和歌集』六六七番歌）が有名だが、早朝の雪とともに聴覚的要素を取り入れてゐるところに共通点が見出だせる。

西行の『山家集』冬部にも一首がある。

雪埋竹と云ふ事を

雪うづむそののくれ竹をれふしてねぐらもとむるむらすずめかな　（五三五番歌）

『月詣和歌集』中の実房詠と同様だ。後に『玉葉和歌集』に撰入される。

平安時代末まで、和歌の中での雀の本意が定まつてきたとみられる。雀は春・夏・秋・冬のどの季節にも見られる鳥だが、主として秋の収穫の時期や雪の降る冬に比較的多く登場する。秋の場合、田園風景の中で、特に引板・鳴子の音に驚いて飛ぶ群雀がよくみられる。冬では、竹藪の中や詠歌主体の宿近くに巣籠もりする雀が騒ぐ姿が多く描かれる。

四、新古今時代

『新古今和歌集』に雀の歌はなく、ここでいふ「新古今時代」とは、『新古今和歌集』歌風形成期を指す。まづ、建久二年（一

一九一）に九条良経が自邸で『十題百首』を催した。参加したのは主催者良経の他、叔父慈円、定家、そして寂蓮の四人だった。題は天象・地祇・居処・草・木・鳥・獣・虫・神祇・釈教で、各十首が詠まれたが、鳥・獣・虫では多くの新奇な題材がみられる。家集の中に良経と定家は雀の歌を残してゐる。

すそのにはいまこそすらしこたかがりやまのしげみにすずめかたよる　（藤原良経、『秋篠月清集』二五五番歌）

なるこ引く田のもの風になびきつつなみよる暮の村すずめかな　（藤原定家、『拾遺愚草』七五六番歌）

良経の歌は小鷹狩りのところ、雀が茂みに逃げ込む光景だらうか。定家歌は『堀河百首』以来の読み方を踏まへつつも、飛来する雀の群れを「なみよる」ものとして描写して、これは実つた稲の情景とも重なる。

建久三年（一一九二）頃の『六百番歌合』では、「冬朝」題として、藤原兼宗の歌に対して源信定（慈円）が雀の歌を詠んでゐる。

三番　左　勝　兼宗

とへかしなにはのしらゆきあとたえてあはれもふかき冬のあしたを　（五四五番歌）

右　信定

のきのうちにすずめのこゑはなるれども人こそしらねけさのしらゆき　（五四六番歌）

右申云、左初五字贈答とおぼえ、又、はての句いたくつよくや。

左申云、雀相応しても不聞。

判云、とへかしなとおける、贈答にあらざる歌、贈答の体、常例なり。又冬朝まはすべき題にあらず、ただ歌のよしあしぞあるべき。のきの中にすずめのこゑのなるること、雪の朝にはげにある事なり。ただ、しもの句は宜しく見え侍り、雀の声は俗にちかくや侍らん。左はての句いたくつよしと右方人申し侍れども、冬朝可勝や侍らん。

兼宗の歌は右方に贈答歌のやうで、しかも第五句は「強い」（印象が強すぎるか）と批判するのに対して、慈円の歌は「雀」がふさわしい題材だとしても、それが「聞こえず」（生かされて

ゐない、か）と左方に言はれる。これに対して、判者俊成は、左の歌は贈答歌のやうだといつても、そのやうな読み方は普通にあるものだ、その上、最後の句も題を回す（言葉を換へて表す）ことをするべきではないので問題ないとする。一方、右の歌では、簷に雀が騒ぐのは雪の朝には現にある光景だとしながらも、下の句は平凡だといふ。また、「雀の声」は俗つぽいといふ。ここにいふ「雀の声」とは、和歌中の表現を指すに留まるか、雀の鳴き声そのものを含んで俗つぽいといふのか、判然としない。いづれにせよ、慈円の歌は、その平凡さと俗つぽさから負けとされてしまつた。[14]

『正治初度百首』は、後鳥羽上皇が正治二年（一二〇〇）に詠進を命じた百首歌で、『新古今和歌集』撰集の際に撰歌資料として重要視されたものとして知られてゐる。歌題は九題が設定されたが、その中に「鳥」が採用された。この鳥題について、永青文庫蔵「俊成・定家一紙両筆懐紙」[15]にみられるやりとりの中で、雁や千鳥は詠むべきではないといふ後鳥羽上皇の指示があつたことが記されてゐる。久保田淳の考察[16]によると、雁・千鳥等は、季節詠の中で既に詠まれてゐるため、鳥題で更に詠まれる必要はなく、むしろ鳥題において新しい素材を使つてほしいといふ上皇の思惑があつただらう。現に、鳥題として詠まれた各歌人の歌は、和歌として珍しい鳥が多くみられる。その中に雀の歌が九首ある。

秋の田のほなみにすだくむらすずめなるこの音にたちさわぐなり　（一九四番歌、惟明親王）

おもへただすずめのひなをかひおきてすだつるほどはかなしきものを　（五九八番歌、源通親）

よをかさね籬の竹にふしなれて軒ばにきゐるむらすずめかな　（七九八番歌、藤原忠良）

なるこひく門田のおものむらすずめおどろくほどのうれしさもがな　（九九八番歌、藤原季経）

を山田のすごがなるこに風過ぎてほなみにさわぐむらすずめかな　（一〇九四番歌、藤原経家）

夕されば籬の竹のむらすずめこれをも友にたのむなりけり　（一七九八番歌、生蓮）

ともすずめひきゐておりぬ山城のとばの田づらに落ぼ拾ふと　（一八九五番歌、藤原実房）

くれ竹にねぐらあらそふ村すずめそれのみ友と聞くぞさびしき　（一九九七番歌、二条院讃岐）

我が宿のその呉竹霧こめてねぐらもとむる村すずめかな

（二一九四番歌、宜秋門院丹後）

ここには従来の秋の田の鳴子に驚く雀（惟明親王、季経、経家）や田の雀（実房）、竹のねぐらで騒ぐ雀（忠良、生連、二条院讃岐、宜秋門院丹後）があるが、通親は飼ひ雀を詠んでゐるところに異色が認められる。

このやうに、新古今時代において、新鮮・珍奇な題材が求められる機会、例へば『正治初度百首』のやうに百舌・鳩・烏等、和歌にいて殆ど詠まれない鳥類が登場する中、雀の歌もみられる。

六、鎌倉時代中期以降

鎌倉時代を通して、雀の歌は皆無ではないが、現存する数は決して多くはない。

貞応二年（一二二三）、二十六歳の藤原為家（定家息）が詠んだ『為家千首』の「雑二百首」中に次の一首がみられる。

夕ひさすかどたのなるこふくかぜをおのがならひにたつすずめかな　（九四七番歌）

寛元元年（一二四三）に為家が企画・編纂した『新撰和歌六帖』に二首採られてゐる。

（こたかがり）　藤原信実

すずめ（ひばり）ゐてせばきかりばのめのまへはあはするたかもひとはねぞとぶ　（七三九番歌）

（ひなどり）　藤原知家

人ぞうきすずめのひなのてなれつつしばしも身をばはなれざるらん　（二五六三番歌）

信実歌は「すずめ」ではなく「ひばり」と伝へる本があつたやうだ。知家の歌は飼ひ雀を題材とするが、『正治初度百首』通親歌同様、雛が巣立ちすることへの悲しさが詠まれてゐる。

鎌倉後期になると、まづ後二条院（弘安八年（一二八五）生、徳治三年（一三〇八）崩御）の自撰歌集『後二条院御集』に一首入る。

暮林鳥

夕あらしのさむき林のむらすずめやどりあらそふこゑきこゆなり　（一三五番歌）

そして、伏見院（文永二年（一二六五）生、文保元年（一三一七）崩御）の家集『伏見院御集』にも一首みられる（同歌は一九四五番歌として重出する）。

寄雪鳥

むらすずめとまりやいづこふる雪にねぐらのはやし竹をれぬなり　（一五五四番歌）

勅撰和歌集に初めて雀が登場するのは鎌倉時代末の、伏見院が撰集下命した『玉葉和歌集』（京極為兼撰）の中で、前掲の西行法師の一首だ。その他、同じく京極派の『風雅和歌集』（光厳院親撰、花園院監修）に二首あるが、それ以外の勅撰和歌集にみられない。『風雅和歌集』の歌を掲げる。

（題しらず）　永福門院

むらすずめこゑする竹にうつる日のかげこそ秋の色になりぬれ　（四五九番歌）

雑歌の中に　浄妙寺左大臣

くれぬるかまがきの竹のむらすずめねぐらあらそふ声さわぐなり　（一七三八番歌）

浄妙寺左大臣（藤原経平）の歌から新味は見出だしがたいが、永福門院の歌は竹林の雀に秋色を見出だすところに、京極派が重んじた実景に即した詠法がみられる。

勅撰和歌集に雀が登場しないのは、おそらく『六百番歌合』判詞にみられるやうに、雀の鳴き声は「俗」であり、勅撰和歌集としてふさわしくないと思はれてゐたためかと推測する。

七、終はりに

始めに掲げた丹羽博之の諸条件に照らし合はせて、雀が和歌で詠まれない題材となつた理由について考へる。

まづ、①にある「鳴き声の美しさ」といふところについて、『六百番歌合』の慈円（源信定）歌に対する俊成判詞が思ひ出される。即ち、「雀の声は俗にちかくや侍らん」と、鳴き声はやはり俗つぽいといふ指摘だ。確かに、雀は「騒ぐ」鳥として描写されることはあつても、可愛く鳴くといふ描写はない。

②の季節との結びつきについて考へると、一応秋の題「田家」、秋の収穫の季節にみられ、また竹林や簷の雀は雪とともに冬に登場する。例外として好忠の雀の雛の歌は春だ。そのため、季節として雀は稲・雪・竹との組み合はせで秋・冬の鳥として認識されてゐたらしい。しかし、雁等の渡り鳥と違つて、留鳥のため、一年中みられる。

③の恋との結びつきについて、肥後と俊頼との間の連歌の中で確認できる程度だ。雀は群れて暮らすため、恋の感情を移入することが困難だつたであらう。

④では、同じく俊頼歌では「しじめ」が序詞・掛詞として使用される程度で、歌枕・縁語は見いだせない。ただ、歌言葉として「むらすずめ」「いなすずめ」「ともすずめ」が早い段階で広まつたやうだ。

この他に、雀が和歌に詠まれない理由として挙げられるのは、早い段階で題材として十分発達・発展しなかつたことだ。田園もしくは人家（簷・竹林）といふ限られた情景の中で、群れて飛んだり騒いだりする雀が本意となり、そこに歌人達は広がりを求めなかつた。

しかし、同時に注目しなければならないのは、新奇・新鮮な題材が求められた時に、雀が用いられたことだ。身近な鳥で、伝統的な歌の材料とされなかつただけに、珍しいものとしての価値はあつたやうだ。

注

（1）日本文学の中の雀を論じたものに、脇谷秀勝「すずめ（雀）と文学—好忠・一茶・言道・放哉・山頭火・木村緑平を中心に—」（『帝塚山大学教養学部紀要』第四十五輯、一九九六年）があるが、この他に各種辞典の項目が参考となる。寺山宏『和漢古典動物考』（平成十四年、八坂書房）、学燈社国文学編集部『古典文学動物誌』（平成六年、学燈社）、菅原浩編『図説　日本鳥名由来時点』（一九九三年、柏書房）等。

（2）「漢詩によまれるもの・和歌によまれるもの　—三代集の和歌と漢詩—」、片桐洋一編『王朝文学の本質と変容　韻文編』（平成十三年、和泉書院）所収。

（3）本論では、『新編国歌大観』にみられる鎌倉時代に至るまでの雀歌の殆どを検討するが、類似性が高い題材のため、省略したものもある。

（4）土橋寛・小西甚一『日本古典文学大系　古代歌謡集』（一九五七年、岩波書店）による。

（5）倉野憲司・武田祐吉『日本古典文学大系1　古事記　祝詞』昭和三十三年、岩波書店、321頁。

（6）和歌の本文・歌番号は『新編国歌大観』による。以下同様。

（7）『好忠集』にもう一箇所「すずめ」といふ言葉が見出だされる。「あさぢふもすずめがくれになりにけりむべこのもとはこぐらかりけり」（「三月をはり」歌中、九十番歌）。「すずめがくれ」とは「雀がかくれる程度の高さ」（久松潜一他『日本古典文学大系　平安鎌倉私家集』一九六四、岩波書店、『好忠集』は松田武夫校注）といふことのやうで、

雀そのものが詠まれてゐるわけではない。

(8) 川村晃生・金子英世『『曾禰好忠集』注解』平成二十三年、三弥井書店

(9) 『堀河百首』一四二五番歌「いたくらのはしをばたれもわたれどもいなおほせ鳥ぞ過ぎがてにする」(『橋』、公実) について『堀河院百首聞書』は「いなおほせ鳥様々の説あり。此歌いかによめるにか不審。一には石たたき、一には雀、一にはたう、一には山鳥、一にはくゐな、一には雁。但、有人云、此歌のいなおほせ鳥は馬也ち云々。猶可尋也。」と注記する (橋本不美男・滝沢貞夫『稿本堀河院御時百首和歌とその研究　古注索引編』(昭和五十二年、笠間書院) による、ただし句読点を施した)。ちなみに、『堀河百首』書入本注にほぼ同文があるが、雀説はない。やはり「稲負鳥」の実態・歌語としての用法が特定しがたい。

(10) 『歌合・定数歌全釈叢書　十五　為忠家後度百首全釈』二〇一一年、風間書房

(11) 川村晃生『歌論歌学集成第五巻　袖中抄　下』平成十二年、三弥井書店、139頁

(12) 木下華子他『歌合・定数歌全釈叢書三　俊頼述懐百首全釈』(平成十五年、風間書房) に詳しい考察がある。

(13) 関根慶子・古屋孝子『散木奇歌集　集注篇』平成十一年、風間書房、425頁

(14) 慈円にはこの他に『拾玉集』中に『六百番歌合』の歌を含んで七首みられ、『新編国歌大観』中の歌人として最多である。世俗を和歌に取り込んだ歌人として好まれた題材だつたやうだ。参考のため、『六百番歌合』以外の歌を掲げる。

(百首、堀川院題) 田家

なるこひくしづがかどたの村すずめあぜつたひしてたちさわぐめり　(二九三番歌)

(一日百首) (竹)

夕まぐれふしにくげなる竹にしもなぐらあらそふ村すずめかな　(九六四番歌)

(詠百首倭歌) (恋) (寄竹恋)

うちながめ人まつやどの呉竹に心みだるるむらすずめかな　(一四七六番歌)

(詠百首和歌　当座百首 [建久元年十二月十五六両夜])

あけぬるか梢によはの雪とぢてねやの軒端にすずめ鳴くなり　(二一六六番歌)

(詠百首倭歌) (田)

なるこひくしづが門田のむら雀たちゐに物を思ふころかな　(二二一八番歌)

(秋歌)

秋の田にむれゐるかりのたつ声にちがひておつるむらすずめかな　(四七四九番歌)

(15) 橋本不美男「正治百首についての定家・俊成勘返状」『和歌史研究会会報』正和五十二年十二月に初めて報告・翻刻がある。

(16) 「藤原定家の虚構と現実」『図説日本の古典　古今集・新古今集』昭和五十四年、集英社